

第1回 滑川市教育支援センター研修会

4月30日（木）に、東部教育事務所より、特別支援教育指導員の和田絵里先生をお招きし、「第1回 滑川市教育支援センター研修会」を行いました。

様々な生徒への支援を考える際の視点や、教育支援センターと学校との連携について、大変示唆に富むお話を伺うことができましたので、共有させていただきます。

1 指導講話「特別な支援を必要とする子供へのよりよい支援のために」

(1) 支援の視点：「社会モデル」への転換

・不登校や発達障害の背景は多様であり、複数の要因が重なっている。

→重要なのは、困難さの原因を子供本人に求める（医学モデル）のではなく、「周囲の環境や関わりとのミスマッチ」と捉える（社会モデル）視点。子供を変えようとする前に、まず環境を整えること。



(2) 二次的障害の防止と肯定的な関わり

・特性による「つまずき」を努力不足やわがままと誤解し、否定的な関わりを続けると、自己肯定感の低下から不登校や問題行動といった「二次的障害」を招く。

・特性の理解：診断名にとらわれず、本人の「凹凸」や「グレーゾーン」の困難さに目を向ける。

・加点法の支援：できないことを叱るのではなく、できたことを褒め、具体的な配慮（指示を短くする、選択肢を示す等）で成功体験を積み重ねることが重要。

(3) 「見立て」に基づく段階的支援

国立特別支援教育総合研究所の「Co-MaMe ガイド」を参考に、子供の状態を「受容期」「試行期」「安定期」の3段階で捉えるとよい。

・状態は日々変化するため、今どの段階にいるのかを関係者が「チーム」で見極める必要がある。

・「受容期」には共感を優先し、「安定期」には自立を促すといった、状態に合わせた支援のミスマッチを防ぐ視点が不可欠。

(4) まとめ 明日からの実践に向けて

・肯定的な関わり：できたことを即座に褒め、失敗を叱らない「加点法」の関わりが自己肯定感を育む。

・具体的な配慮：指示は短く具体的に行い、選択肢を提示して本人に選ばせるなど、成功体験を積める工夫を行う。

・背景への想像力：「そうせざるを得ない理由」を想像し、本人の努力を認めることが信頼関係の基盤となる。

2 情報共有ワークと指導講話

教育支援センター支援員同士で、日頃困っていることや悩んでいることを共有しました。また、その解決策について話し合いを行いました。

【教育支援センター支援員の方々が日頃困っていること】

- ・ほっとルームでの過ごし方、声のかけ方
- ・保護者からの、児童生徒の実態と合わない要望への対応
- ・担任の先生方との関わり、連携
- ・ほっとルーム内での子供同士の関り
- ・学習との両立
- ・「勉強したくない」という児童の声の裏にある本当の想いに触れるための方法
- ・保護者や前任者との連携、引継ぎ
- ・粗暴な行動をしてしまう児童生徒への対応

【和田先生からの指導講話】

(1) 子供の背景を理解する重要性

- ・行動の裏にある背景の把握：「教室に入れない」「勉強が嫌い」といった言葉や行動の裏にある、真の理由（視覚的な問題、書字の困難、音への過敏さなど）を知ることが不可欠である。
- ・視点の共有：支援センター、学校、保護者では子供の見え方が異なる（三者三様）ため、それぞれの視点をすり合わせる機会が必要である。

(2) 具体的な連携のあり方

- ・学校・担任との連携強化：ケース会議などを通じ、教室で最も長く接している担任から情報を得ることで、子供への適切なアプローチを検討すべきである。
- ・専門機能の活用：書字の苦手さなど具体的な困難さがある場合は、それらを改善・克服する場である「通級指導教室」との役割分担や連携を考慮する。
- ・連携ノート（日誌）の活用：支援員と担任が、子供の困難さや支援への反応を共有するための「交換日記」のような簡易的な日誌を活用し、効率的かつ継続的に情報を共有する仕組みが有効である。

(3) 今後の展望

- ・効率的な連携体制の構築：教育支援センターだけでなく学校組織全体として、いかに気楽かつ効率的に連携できるかを模索していくことが、子供たちのより良い支援に繋がる。

